

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ジハード史観を脱却すべきではないか：
嶋田氏の批判に答える

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹沢, 尚一郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008335

「ジハード史観を脱却すべきではないか ——嶋田氏の批判に答える」

竹 沢 尚 一 郎*

Pour une nouvelle conception de l'islamisation en Afrique occidentale: réponse à M. SHIMADA

Mon article qui en consacré à établir une thèse concernant l'islamisation en Afrique occidentale ("Essai sur l'islamisation en Afrique occidentale: critique de la perspective historique de Trimmingham", *Afurika Kenkyu*, n.32) a été l'objet d'une critique de la part de M. Shimada, parue dans la trente-troisième volume de ce Journal.

J'ai lu attentivement cette critique, mais je n'y ai éprouvé aucun besoin de rectifier les arguments développés dans mon dernier article, étant donné que celle-là est chargée et de méprises relatives aux faits historiques et d'interprétations tendancieuses de mon étude.

Cet article qui est destiné à répondre à M. Shimada reprend d'abord les grandes lignes de ma thèse pour la préciser; il indique ensuite de nombreuses erreurs commises par lui dans sa critique.

本誌の第32号に発表した拙稿「西アフリカのイスラム化にかんする一考察——歴史主義批判」にたいして、静岡大学の嶋田氏から、本誌第33号に批判がよせられた（「西アフリカ・イスラム化パターンの3類型と『フルベ族の聖戦』——S. Trimminghamの西アフリカ・イスラム史論をめぐる」）。拙稿をこまかくお読み下さったことにたいして、まずは感謝したい。

しかし残念なことに、わたしの論文内容と嶋田氏の論とは必ずしも十分には噛みあっていないようである。その理由は、一つには嶋田氏の論が多くの誤認（歴史的事実の誤解とわたしの論文を含めた資料の誤読）を含んでいるためであり、それに加えて、わたしたち2人のあいだに決定的な視点の相違があるためである。すなわち、わたしに

としては、これまで西アフリカのイスラム化に関する基本的研究とされてきたトリミングガムの *A History of Islam in West Africa*, 1962が、資料と理論の両面で決定的な欠陥を含んでいることを指摘することが問題であったのにたいし、嶋田氏にとって重要なことはどうやらトリミングガムの所説を忠実に追うことだけであるらしく、わたしの所説そのものにたいする批判もなければ⁽¹⁾、なんら新しい知見が加えられているわけでもない。

わたしにとってどうしても理解できないことは、なぜいまの時点で、トリミングガムのこの本をそれほどまでに物神崇拝しなくてはならないのかということである。1962年に書かれたこの本は、依拠する史料にかんして、その後実現された西アフリカの歴史研究の発展から完全にとり残されており、また理論的観点からも徹底的な見直しが必要とされている。この本を嶋田氏のように高く評価

* 九州大学文学部

すべき理由は、どこにもないのである。

わたしは以下のページで、なぜトリミングムの学説が批判されなくてはならないのか、その理由を述べることから始めたいと思う。それをつうじて、わたしが西アフリカのイスラム化をどのように理解しているか、その概要が示されるであろう。つづいて嶋田氏の批判のどこに誤りがあるかを、資料にもとづきながら一つ一つ指摘していくことにしたい。それは微細な欠点をあげつらうためではなく、イスラムを中心とした西アフリカ史にかんしてあやまった理解が広まらないことを願ってのことである。

トリミングムの研究が史料の不足という致命的欠陥を含んでいるのは、とりわけ彼が「イスラムの停滞の時期」(1962:141)と称する、17～18世紀の西アフリカについてである。1591年のモロッコ軍の侵攻によるガオ帝国の崩壊以降、サハラ交易の停滞と、そして北アフリカ・サハラ地域における政治的混乱によって、それまで西アフリカ史研究のもっとも重要な源泉とされていたアラビア語史料が乏しくなってくる。イスラム史家としてのトリミングムにとっては致命的な状態であり、しかもこの本の出版された1962年には、現地調査を踏まえた西アフリカ史研究はいまだ原初的な段階でしかなかった。

ところがその後の研究の進展によって、わたしたちの理解がもっとも大きく変えられたのはまさにこの時期の西アフリカ像なのである。わたしが前稿で Wilks をはじめとする40点あまりの資料に依拠しながら明らかにしたように(1988:22-27),すでにマリ帝国やガオ帝国の時代から進められていたイスラム交易者たちの拡張運動は、ガオ帝国の崩壊後も継続して進められ、アカン地方やフータ・ジャロン、セネガンビア地域にその影響力を拡大していった。広範囲におよぶかれらの活動は、それまで孤立性の強かったこれらの地域を一つのネットワークの中にとりくむことによって、イスラムのみならず新しい技術の伝播と、国家の形成等の社会変革を可能にしたのであり、この時期をトリミングムのように「イスラムの停滞の時期」と称すべき理由はどこにもないのである⁽²⁾。

トリミングムがこの時代のこの地域についてはほとんど知識をもたなかったらしいことは、序の部分でつぎのように述べていることから窺われる。「南部のギニア諸国家はわたしたちの領域の外にある。というも、それらはスーダン(=サバンナ)諸国家と接触をもたなかったし、イスラムの影響をうけていなかったからである」(1962:7)。今日の歴史学者であれば、けっしてこんな発言はしないであろう。嶋田氏はトリミングムを擁護して、この時期の「外見上の無政府状態にもかかわらず」、イスラム交易者の拡散が見られた(1962:141)と彼が書いていることをあげている(嶋田1988:8)⁽³⁾。しかしながら、トリミングムはつづいて「それはイスラム文化の意気消沈した時代であり」(1962:142)、「イスラム教徒は隣人から明確に区別されず」、「アフリカ人の生活を変えようとしなかった」(1962:143)とするのである。トリミングムの不理解と、そして嶋田氏の善意にすぎる解釈は明らかであろう。

イスラムがこの時期をつうじて西アフリカ各地に広く浸透し、各地の社会に「本質的寄与」をなしていたことは、19世紀にあいついだいわゆるフルベ族のジハードが、「異教徒」にたいしておこなわれたというより、むしろ「しばしばムスリムがムスリムにたいして戦う」(Last and Al-Haji 1965:236)性格のものであったことに如実に示されている(他に Rodney 1968:271-277; Waldman 1965:336-346; Hiskett 1984:192-193; Clarke 1982:148 とも、フータ・ジャロンやマッシナ、ハウサランドで、ジハード以前にイスラムの進展がいちじるしかったことを記している)。イスラムはジハード以前の西アフリカですでにかなりの重要性をもっていたのであり、嶋田氏はこの時期の西アフリカ・イスラムにかんする文献をほとんどなにも引用していないが、もしわたしと同じくらいの数の研究論文にあたっていたなら、トリミングムの見解の欠陥にもっと敏感であることができたであろう。

一方、トリミングムの理論的枠組みとしては、西アフリカのイスラムの展開を3つに区分し、それぞれを「インペリアル・カルト」の時代(11～

16世紀)、「イスラムの停滞と異教の反作用」の時代(17~18世紀)、「イスラムの拡張の偉大な世紀」(19世紀)とした点があり、またその点に尽きる。このうち、第2期である「イスラムの停滞」については、前稿でも述べ、すぐ上の箇所でも述べたように、かれの不理解以外のなにものでもない(注2参照)。またそれ以前の段階の「インペリアル・カルト」なる整理の仕方も、きわめて不正確なものでしかない。

トリミングが、マリやガオなどの中世の諸国家のイスラムを「インペリアル・カルト」と称することの根拠は、以下の点にある。これらの国家において、イスラムの受容は王とその側近にかぎられ、民衆のレベルにまでたっしていなかったばかりか、王もかれらに改宗を強制しなかったこと、それゆえ国家の基礎はイスラムではなく、伝統的な体制のうちにあったことである(1959:138-139; 1962:34-37, 80-83)。ようするに、トリミングの見方によれば、これらの国家におけるイスラムの受容は「みせかけだけのもの」にすぎず(1962:29, 153)、イスラムは「そのアイデンティティーを失うまでにアフリカ化した」もの(1962:233)でしかなかった。その結果、イスラムは「アフリカ人の生活を変えようとしなかった」し(1962:143)、「国家の伝統的構造にいかなる本質的寄与もなさず」(1959:141)、「産業の領域でもほとんど影響を残さなかった」(1959:195)というのである。

別の箇所でトリミングは、「インペリアル・カルト」のかわりに「階級宗教」なる概念をもちいているが、それは内包が支配者と交易者に広げられただけであり、基本的には「イスラムの拡張の偉大な世紀」とされる19世紀のイスラムと対比させるための概念である(1959:24)。彼はこの19世紀を大きく評価するが、それは一連のジハード、ひとつづきの「革命」によって、イスラムがはじめて「国家の全構造をくつがえすもの」(1959:139)となり、「新しい時代を先導する社会的・政治的力に変えられた」(1962:233)からだというのである。

トリミングの議論の根底にあるのが何であ

るかは、以上の限られた引用からも明らかであろう。彼にとって重要なことは、「みせかけだけのイスラム」と真正のイスラム、いいかえるなら「チャレンジしないイスラム」と「変革のイスラム」(1962:233)を区別することであり、後者のイスラムを実現するには19世紀のジハードという強圧的な手段が必要であった。そしてその手段を採用することによって、はじめてイスラムは西アフリカの諸社会を変革する、真に革新的な力になったというのである(嶋田氏においてもこうしたジハード至上主義は明らかであり、私は氏いがいにジハードを「聖戦」ではなく、聖戦と記す日本人研究者を知らない)。

たしかにジハードはイスラム教徒の義務の一つとされてきたし、そうした手段を採用したことがイスラム勢力の拡大に大きく貢献したことは、疑いえない歴史的事実であろう。それゆえトリミングがイスラムを中心とした西アフリカの歴史を考えるにあたって、そうした見解を適用したことは理由のないことではない。しかしながら、その見解の無批判な適用が、かれの書をいちじるしく浅薄なものにしたこともまた事実である。イスラムのセンターである中東地域であれば適用したかもしれないそうした見解は、イスラムの周辺地域としての西アフリカに適用されたことによって、大きな誤解と不理解を生むことになったのである。

イスラムのセンターと周辺地域としての西アフリカとの違いは、イスラム化が開始された時点の歴史的状况を考えれば明らかであろう。前者においては、イスラムの開始以前に、よく発達した交易と強大な国家の歴史が長く存在し、宗教的にも普遍的傾向をもつキリスト教やゾロアスター教、ユダヤ教の浸透が広範囲に見られた。そうした枠内で誕生したイスラムは、一方では交易を掌握していたキリスト教やユダヤ教などの一神教には寛大に臨みつつ、他方で多神教的伝統にするどく対立することによって、短期間に自己の確立と勢力の拡大を実現することができたのである。これにたいし、イスラムの浸透が開始されたばかりの西アフリカの状況は、本質的に異なっていた。それはいまだ国家組織を発達させず、たがいに交流を

もたないままにそれぞれが孤立してある、いわゆる部族社会の状況であった。イスラムはそのような西アフリカの諸社会にたいして、まず広範囲な交易ネットワークで結び合わせることによって、ついで多くの部族を包含する政治的統合＝国家を実現することによって、真に変革の種子になることができた。いいかえるなら、イスラムは、たがいに孤立して存在していた西アフリカの部族社会が、その限界を打ち破って、より大きな文化的、経済的および政治的統合を実現するための触媒として作用したということである。

それではイスラムは具体的に何をもたらしたのか。私の前稿はそれを明らかにすることにさざられていたのであるが、まず大西洋岸からハウサランドまで、西アフリカ全土をおおいつくす交易ネットワークを確立したことであり、それをつうじて各地によく発達した手工業を伝えたこと、そしてそうした経済的發展に根ざすかたちで各地に国家を樹立したこと⁽⁴⁾である（竹沢 1988:21-27; 36-38）。こうした一連の過程の中で実現されたのが、今日1千万以上の人口を擁するマンデヤハウサ、フルベなどの一大文化的・社会的単位なのであり、そこで作用していたのが「うわべだけのイスラム」か否か、あるいは「アフリカ化されたイスラム」か否かという議論は、どうでも良いことである。というよりむしろ、イスラムは「アフリカ化」したがゆえに西アフリカに広く浸透し、真の変革の種子となることができたのであって、そうした「アフリカ化」の過程にこそ、イスラムを一方的に与えられるだけでなく、積極的に再解釈していったアフリカ諸社会の能動性を認めるべきであろう。トリミングムは（そしてそれにならって嶋田氏もまた）、イスラム化の概念を狭量にとらえることによって、真に実現されたものがなんであったかをまったく理解できなかったのである。

もっとも、「うわべのイスラム」と真正のイスラムを区別することは、イスラム史学の立場からすればなんらかの意義を有しているかもしれない。しかしトリミングムの関心は、イスラム史学のそれではなく、西アフリカ史のそれであった。かれは A History of Islam in West Africa の序で、こ

の本の目的を「イスラムがどのような仕方でスーダン（＝西アフリカ）の歴史を形作ったかの試みである」（1962:7）と明記しているが、その内容はその目的を大きく裏切ったものでしかない。19世紀以前のイスラムについてほとんどいかなる文献も活用していない嶋田氏は、トリミングム説を無条件に受け入れ、「筆者は、この Trimingham 説を基本的に支持するし、Trimingham 説の大枠の修正を求めるような研究は出ていない」（嶋田 1988:14）とするが、いったい何によって氏はそうした評価を下しえたのか。私たちも氏にならって、理解を1962年まで引き戻さなくてはならないとでもいうのであろうか。

トリミングムの理解の浅さは、彼が「イスラムの拡大の偉大な世紀」と呼ぶ19世紀にもおよんでいる。彼はそれ以前の「階級宗教」としてのイスラムと、ここで実現された神政国家内部でのイスラムとの断絶を強調するあまり、この点では嶋田氏も認めているように（嶋田 1988:15）、なぜ一連のジハードがフルベ人を主勢力として行なわれたのか、そしてフルベ人の居住する地域の中でも特定の地域でのみ行なわれたのかについて、説明することができないのである。わたしは前稿において、フルベ人によって支えられた各地のジハードを検討し、またそれ以前のイスラム化の過程とのつながりを考慮することによって、一つの答えを示すことができた（竹沢 1988:27-33, 35）。嶋田氏はそれを理解していないようなので、つぎに概略を示すことにする。

19世紀にフルベ人を母体とするジハードがあいついだことを考えるには、彼らの置かれていた歴史的状況から出発することが前提になる。がんらい遊牧の民であるフルベ人は、イスラムとは無縁な生活を続けていた（Levtzion 1975:798; Robinson 1985:47）。しかし彼らは、西アフリカが全体的な成熟を見た中世末期いらい定着を開始し、農耕民と安定した関係を結ぶようになっていった。とりわけフータ・ジャロンやマッシナ、ハウサランドのように、マンデヤハウサなどの先進の諸民族との安定した関係が樹立された地域では、彼らはイスラムを受け入れ、交易のネットワークのなかに

組み込まれることによって、十分な経済的力を獲得していった。ところがそうした経済的実力にもかかわらず、後発の彼らの政治的地位は低いままであった。そうしたなかで、彼らは手中にした社会・経済的実力と、政治的現実のあいだに齟齬を感じるようになっていったのであり、そうした彼らが政治的、経済的および文化的なヘゲモニーを獲得するために立ち上がったのが、19世紀にあいついだ一連のジハードなのである⁽⁵⁾。

嶋田氏はその論文の中で、フルベのジハードを支えた要因の一つとして、18・19世紀の西アフリカに経済的發展が見られたこと、そしてそれをつうじてフルベ人が商品生産者として経済的実権を獲得したことをあげているが(1988:15)、それはすでにわたしが前稿の中で論じたことであり、しかもいくつかのジハードを比較しつつ包括的に論じたことである(竹沢 1988:27-32)。経済的側面についての研究がもっとも進んでいるフータ・ジャロンについていえば、17世紀いらいこの土地をとってニジェール川流域のマンデ交易諸都市と大西洋岸のヨーロッパ人拠点とのあいだに交易ルートがひらかれ、この地域はいちじらしい経済的發展を見た。ここから輸出されたのは、鉄、布、染料、家畜等であり、とりわけ皮と奴隷であった。こうした交易の進展は、交易者と同様に商品の第一次生産者としてのフルベ社会の發展をもたらし、土地を支配する先住の農民や支配層とのあいだに軋轢をまねくと同時に、フルベ社会のなかにも多くの財をもつ貴族層と平民層への階層分化をもたらすことになった。こうして長い時間をかけて実現された社会・経済的変化が、18世紀半ばに開始されるジハードを準備し、成功に導いたのであり(Rodney 1968; Levtzion 1975:207-216; 竹沢 1988:29-30)、そのことはジハードの行なわれた他の地域でもいえることである⁽⁶⁾。

一連のジハードが純粋な宗教改革運動というより、むしろジハード国家の建設をつうじての政治・経済・社会・宗教の多面にわたる包括的な改革運動である限り、それは特定の社会勢力によって支えられることが必要であり、その社会勢力を生むにいたる一連の社会・経済的変化が前提になって

いることは明らかである。それゆえ、トリミングムのようにそれ以前の段階との断絶を強調することは、私が前稿で強調したように(1962:32)、事実認識をあやまらせる危険があるのである。

今日トリミングム説を無邪気にくりかえすことが危険であるとわたしの信じる理由は以上である。わたしはこの説がすでにのりこえられたものと考えており、それは今日の次第に「増加しつつある歴史家の見解」でもある(注2参照)。しかしそれは、嶋田氏にとってはいまだに「西アフリカ・イスラム史研究の基礎」(1988:2)とされているらしい。いずれに分があるか、その判断はわたしが下すべきものではなく、読者諸兄姉におまかせすべきであろう。

*

さて嶋田氏の論文は、他にもわたしの論文にたいする多くの「批判」を含んでいる。しかし残念なことに、それはわたしにとって少しも参考になるものではなかった。というのも、それは根拠のない断定に満ちており、文献の引用はつねに部分的かつ恣意的で、しかも誤訳にみち、主観が客観を支配する傾向があり、しばしば現在から過去が類推され、わたしの論文が引用されるときにはきまって歪曲が加えられているためである。それは本来ここで取りあげるほどの価値はもっていないが、西アフリカのイスラム史にかんするあやまった理解が広がらないためにも、氏の「批判」のどこに誤りがあるかをつぎに指摘することにする。

嶋田氏の議論の多くが根拠のない断定からなっているというのは、たとえばつぎの点である。氏はジハード以前の西アフリカ・イスラム史にかんするトリミングム説の評価について、「筆者は、このTrimingham説を基本的に支持するし、Trimingham説の大枠の修正を求めるような研究は出ていない」(1988:14)と断定するが、氏の論文の中にはジハード以前のイスラム化にかんする研究は1、2点しか引用されておらず、氏がいかなる資格でこのような断定を下すことができたのか、わたしにはまったく不可解である。また氏はトリミングム説を擁護して、西アフリカにおけるイスラム化の進展はまず「平和的手段による地道な2

つのプロセス」として見られたが、「西アフリカ内陸社会は基本的に国家社会であり、そのためイスラムは「基本的に外来集団の宗教にとどまり、民衆生活の中に深く入ることがなかった」とする(1988:14)。しかしここでも、「西アフリカは基本的に国家社会であり」とは何を意味するのか、いかなる根拠にもとづいての断言なのか、やはりわたしには不明である。

嶋田氏の超主観的傾向がもっとも発揮されるのは、つぎのような発言である(これはわたしが、アルハジ・ウマルの「聖戦」がむしろ否定的な効果をおよぼしたことの根拠として、Oloruntimehin 1971を引用したことについてする発言である)。「Oloruntimehin のこの研究を、筆者は(嶋田氏は)参照することができなかった。Oloruntimehin がアルハジ・ウマルの聖戦に対して批判的な視点をもっていることはたしかである。しかし彼の他の研究からみて、Oloruntimehin が、竹沢氏が引用しているような断定的判断をアルハジ・ウマルの聖戦に対して下しているかどうかは疑わしい」(1988:17)。文献に接しなくてもその内容を類推することができるとは、おそろべき千里眼である。しかしその千里眼は例によってあやまっているのであって、アルハジ・ウマルのジハードを包括的に論じたその書において、著者 Oloruntimehin は明確に言いきっている。「(イスラムを広めるという)この目的が、十年や一世代で実現できるなどと想像するのは夢想家であろう。さまざまな宗教的・文化的背景をもつ人びとを良いイスラム教徒にすることは、剣ではけって達成されなかったのである」(Oloruntimehin 1971:316)。さらに、「トゥクレールのケースは、イスラムにおける宗教と政治の見せかけの一体性の虚偽を証明しているように思われる。このアイデアを現実に変えようというトゥクレールの苦悶にみちた努力の無益さから、以下のことが明らかになる。西アフリカの多くの社会は、とくに平和的な宣教をつうじてであれば改宗を拒絶するわけではないが、宗教的理念を国家に結びつけようという試みがなされたときには、自動的にもとの文化や政治・社会体系との暴力的な衝突が現われてきたということである」

(*ibid.*: 324)⁽⁷⁾。

嶋田氏の論文に一貫するのは、主観を客観に優越させる傾向である。氏はわたしが Oloruntimehin をうけて、アルハジ・ウマルのジハードはむしろイスラムに反対する勢力を生みだしたとして、その例にドゴンやバンバラ社会をあげたのにたいし、かれのジハードはこれらの社会のイスラム化に貢献したと主張する。その証拠として氏があげるのは、アルハジ・ウマルの築いた「トゥクレール帝国政府も、フランス軍に攻められた際は、ドゴン地域にたてこもった」(1988:12)ことであり、氏がバンバラの中心地セグーを訪れたときに、「今では完全なイスラムの街になっており……、毎朝、街中が沸き立つようなお祈りの声に目を覚まされ、セグの街に充ちる宗教的エネルギーのすさまじさに感動した」(1988:13)という個人的体験である。しかしながら、トゥクレール帝国がその首都をバンジャガラにうつしたのは、高台に位置するこの土地が防御に適しているという戦略的理由からであって(Oloruntimehin 1972:163)、嶋田氏の期待するようにドゴン人のあいだでイスラム教徒の獲得に成功したためではない。現に、トゥクレール帝国の崩壊後20年余りのちにこの地で調査をおこなったドラフォスは、バンジャガラ地域の11万余のドゴン人のすべてが非イスラム教徒であると明記している(Delafose 1912:I,161)。バンバラの首都セグーについても事情は同じであり、ドラフォスによればこの地域に住むバンバラ人のうちイスラム教徒の割合は5%にすぎず(*ibid.*:163)、しかもこの地で調査をおこなった西アフリカ・イスラム史の権威マルティーによれば、その大部分はバンバラ人ではなく、漁業カースト民ソモノである(Marty 1920:47sq.)⁽⁸⁾。嶋田氏の上の発言は、現在の経験から過去を推察したものにはすぎないことが明らかであろう。

主観が客観を超越する嶋田氏の傾向は、わたしにたいする批判の核心にもあらわれている。わたしが「中世の大帝国は、その繁栄の基となった金の産地を直接支配したことは一度もなく、その交易と運搬はこれらの交易者の手に握られていた」と述べたことを批判する氏は、その根拠として

Levtzion を引用している。「ガーナやマリの支配者たちは、交易センターの直接支配よりも、金産地の支配の方が重要だとみなしていた」(Levtzion 1980:115, 嶋田 1988:8 より)。しかしこのくだりは明らかな誤訳であって、Levtzion はわたしの主張するように、「ガーナやマリの支配者たちは、金産地への侵入より、交易センターにたいする直接的權威のほうが重要であるとみなしていた」と書いているのである⁽⁹⁾。また氏は、わたしが上記のように主張したことの典拠として Al-Mas'udī, Al-Bakrī, Al-'Umarī らをあげたことを批判して、「ここには、そんなことは何も記されていない」とする(1988:7)。しかし Al-Mas'udī は、嶋田氏も認めるように(1988:7)、交易者と金の生産者とのあいだでおこなわれる沈黙交易についてくわしく書いている(Cuoq 1975:60-61)。嶋田氏の見解は異なるようであるが、わたしは沈黙交易の記述を、王が金産地を直接支配していなかったことの十分な証拠と考えている。金産地が王の支配下におかれていたのであれば、なぜ沈黙交易というまわりくどい方法が必要だったのだろうか。

Al-'Umarī は、王と金の生産者の関係についてつぎのように言明している。「スルタンが望むなら、彼らを(金の生産者を)したがわせることもできたであろう。しかしこの王国の王は経験から、もし金の町を支配し、彼らにイスラムを強制したなら、金が乏しくなってしまうのは無に帰すであろうことを知っていた」(*ibid.*:264-265)。この記述も、王が金産地を支配していなかったことの証拠以外の何ものであろう。一方、Al-Bakrī は、「金鉱からえられる金塊はすべて王のものになり、金の粉だけが臣下のものになる」と述べている(Cuoq 1975:101)。しかしこの記述だけでは、王が金産地を支配していたことの証拠としては不十分である。しかも彼はそのすぐ前の箇所で、王が塩や銅の交易に重い税をかけていたことをくわしく説明している(*ibid.*:101)。金の交易にかんするくわしい記述があらわれるのは16世紀のフェルナンデスの記録であるが、この資料は比較的入手しにくいいため、以下にその内容を記すことにする。

「ジェンネは城壁をもち、石と石灰でできた大

きな街である。金の鉱山まで行く商人がやってくるのはこの街である。この商売をおこなうのはウンガロスとよばれる特別な人種であり、彼らは赤もしくは褐色の肌をしている。金の産地に近づくことができるのは彼らだけであるが、それは彼らがたいへん信頼されているためである。彼ら以外には、白人であれ黒人であれ、だれもその土地に行くことはできない……。

金の産地は7つあり、それぞれ1人の王がいる……。これらの王は、その臣下とどのように異教徒の黒人である。彼らの唇はたいへん厚く、その上にいつも塩をのせている。彼らのもとは人間や家畜のかかる多くの病気があるが、塩を食べることでそれを治している。塩が高く評価されるのは、そのせいである。

人の話によると、塩を運ぶ商人は相手を見ないで塩の山を作って放っておき、かわりに黒人がやってきて金を置くとのことである。しかしこの話は正確ではない。実際には、ウンガロスという黒人はこの人びとを知っていないといい張るのである。というのも、彼らだけがこの国に入ることを許されているためである」(Fernandes 1938:85-89)。

フェルナンデスはさらに、マリの王が臣下に命じて、この人びとのうちの一人を自分の前に連れてこさせようとしたエピソードを書いている。しかし彼は食事と会話をこぼんで、結局死んでしまった。それいらい、「彼らはウンガロス以外の商人をこぼむようになり、マリの王も彼らをつうじてしかその情報をえられなくなった」(*ibid.*:89)というのである。(このウンガロスについて、嶋田氏は「ここで Fernandes は、ウンガロスが『黒人』だなどとは記していない」というが(1988:6-7)、フェルナンデスは明確に「ウンガロスという黒人」と書いているのである。嶋田氏はフェルナンデスにあらず、レヴチオンの断片的な引用(Levtzion 1980:165-166)だけにしがたいため、このような明白な誤りをおかしたのであろう。)

フェルナンデスがウンガロスとよぶこのマンデ系交易者は、マリ帝国の全盛期であった14世紀にはその活動範囲をひろげ、ハウサランドやアカン

地方にまでおよんでいたことが知られている(Hiskett 1984:310; Wilks 1982)。これらの土地は明らかにマリ帝国の支配地の外側に位置しており、金をもとめる交易者の活動が、帝国の支配地をこえて広がっていたことは明らかである。そしてそうであるがゆえに、金産地からは遠くはなれたガオの地に本拠をおいたガオ帝国が、マリ帝国をはじめとする他の諸王国を圧倒して、16世紀に西アフリカ史上最大の版図を広げることができたのであろう。わたしは以上の資料から、前稿で述べたように、中世の大帝国の経済的基盤は金産地の直接支配ではなく、その取り引きを掌握していた交易者にかける税にあったと結論づけることができると考える⁽¹⁰⁾。嶋田氏は「マリ王が金産地を掌握していた」(1988:8)し、「その王権が、王国内の金交易を掌握していなかったということは考えられない」(1988:8)と主張するが、その主張はいまなお根拠をもっているだろうか。

主観が客観を支配する嶋田氏の傾向はさらにつづく。わたしがトリミングムの「インペリアル・カルト」や「イスラムの停滞」の解釈は、イスラム交易者の貢献を軽視していると批判したことを再批判して、嶋田氏はつぎのように述べる。「Imperial cult の時代において、交易集団は西アフリカ・イスラム化の、むしろ主役であった。西アフリカ・イスラム化の第一の波、それは交易を通じてのイスラム化だというのは、Trimingham(1962:27)の基本主張である」(嶋田 1988:5)。しかしながら、嶋田氏の引用する箇所ではトリミングムが述べているのは、ガーナ帝国のイスラム化にたいしてサハラの人交易者がはたした役割であって、西アフリカ内部のイスラム化についてではない。また嶋田氏は、トリミングムが「Imperial cult の時代とは、イスラムが一部政治支配者の cult であり、同時にそしてそれ以上に『外来交易集団の cult』であった時代である」と主張しているとして、トリミングム 1962 の28-29, 32-33, 64ページをあげている(1988:5)。しかしこのうち、28-29はガーナ帝国へのイスラムの導入にかかわる記事であり、ここで「外来交易集団」というのがサハラの白人交易者をさしていることは明らかである。

32-33 ではイスラムが各地の支配者や交易者に受け入れられたという記事があるが、「確実なことは、その進展の平和的な本質と黒人の宗教生活や社会生活にたいするインパクトの弱さである。それは、イスラムが支配的な異教的社會構造のうちに階級宗教として採用されたという特殊性によって」として、むしろイスラム化の「うわべだけの」性格を強調するだけにおわっている。また64では、マリ帝国のイスラムについて、「これらの国家(マリ帝国)においてイスラムが王の祭祀になったように、交易集団の祭祀でもあった」とする。しかしながら、その後の箇所では、マリ帝国のイスラムを総括して、「イスラムは国家組織の中でマイナーな位置を占めていた。それはインペリアル・カルトとして受け入れられていたのであって、その結果マグリブ人からはイスラム国家と見なされていたが、王の側近と白人交易集団の外ではほとんど信仰されていなかった」(80-81, 強調竹沢)という。結局トリミングムがイスラムは「外来」交易集団の宗教であったというとき、西アフリカの黒人交易者ではなく、北アフリカからの白人交易者をさしていることは明らかである。

西アフリカの最初のイスラム化が白人交易者の手でおこなわれたことは、あらためて強調するまでもない歴史的事実であり、わたしとしてもそれを否定したことは一度もない(だれがそれを否定することができるだろう)。しかしながら、西アフリカ内部のイスラム化の主役が白人交易者であると主張することは、基本的にまちがっている。その主張が成立するためには、西アフリカのイスラム化の進展に決定的な貢献をはたしたことが明らかであるマンデ系交易者の役割を無視するか、あるいはかれらが白人であったと曲解することが必要だからである。トリミングムは西アフリカ内部でのイスラム化の進展についてはほとんど言及していない⁽¹¹⁾、嶋田氏もまたかれの視点を無批判に受け入れて、「この時代の(1950年までの)イスラム化の主体は、あくまでも、サハラを越えてやってくるイスラム商人である。王国の政治支配者たちは、かれらを保護し、それによって得られる経済的利益が大きいこともあって、イスラム化

する。しかしそのイスラム化は表面的なイスラムにすぎない」(1988:6)とするが、これは何を考えての発言であろうか。

さらに嶋田氏は、「Trimingham が西アフリカのイスラム化の基本流とみているのは、『平和手段』による、したがって歴史の表面にあらわれない地道な……プロセスである」(1988:10)というが、ここで氏が言及しているのは、白人交易者による西アフリカへのイスラムの導入であろうか。それとも黒人交易者による西アフリカ内部でのイスラム化の進展であろうか。前者であるとすれば、わたしはこの点でトリミンガムを批判したことは一度もないのであって、嶋田氏の批判は相手をまちがったことになる。後者であるとすれば、トリミンガムが本当にそのように主張しているという根拠はどこにもないのであって、その見解は、じつはわたしのトリミンガム批判と、トリミンガム説を混ぜあわせてできた見解にすぎないのである。

嶋田氏の論文は他にも多くの不理解を含んでいるが、それがとりわけ明らかになるのはマンデ系諸民族について語るときである。たとえば氏は、「マンデ系商人に『起源』があるとしたら、それは当然、ガーナ帝国の住人ソニンケと関連しているはずである」(1988:6)とし、また「このソニンケ系商人について一言も触れず、そして何の根拠もなく、Imperial cult の『以前の段階』にも、『イスラムはとくにマンデ系の人びとの手を通して、西アフリカの各地に大きな影響をもってはいりこんでいた』(竹沢 1988:20)、と記されても、それは受け入れられない」(1988:7)と述べているが、このくだりは以下にみるように、根本的な不理解とあやまちを示している。1. わたしはマンデ系集団の手によるイスラム化が、18-19世紀の聖戦以前の段階から進められていたといっているのであって、嶋田氏の誤解するように「インペリアル・カルト」以前の段階でイスラム化がおこなわれたといっているのではない。2. わたしがマンデ系交易者というときに、ソニンケのそれを考慮していないはずがない。マンデ系社会研究の権威 Delafosse の書を少しでもひもといてみれば明らかのように、ソニンケは言語的にも文化的にもマンデ

系の一部であり、その中に含めるのが当然である。

3. 嶋田氏はソニンケとマンデを異集団として、排他的にとらえるトリミンガムの視点をそのまま踏襲している⁽¹²⁾。しかし Delafosse 以来のマンデ研究者の一般的見解は、言語・文化的共通性をもつ包括的単位をマンデ系と称し、マリ帝国の主要構成メンバーとその子孫である一民族集団をマリンケないしマンディングと呼ぶことにある(Delafosse 1912.I:178sq.; Houis 1959:38-41; Murdock 1959:64-77)。社会集団としてのソニンケはマンデ系の一部なのである。4. ガーナ帝国の拡張と滅亡以来、その構成員の一部が西アフリカ全土に散り、各地にマンデ系交易者集団を形成したのは事実である⁽¹³⁾。これにたいし、ガーナ帝国の本拠地にそのまま残った社会集団が今日ソニンケと呼ばれているのであって(中世の記録ではかれらはワコレと呼ばれていた、たとえば *Tarikh el-Fettach*:40)、各地に形成された交易者集団を嶋田氏のようにソニンケと呼ぶのは、現在と過去を混同したり、現在から過去を類推する危険がある。以上の理由から、これらの集団の総称としてはソニンケではなく、わたしがおこなったようにマンデ系交易者集団とするのがもっとも適切であると考えられる。

以上のほかにも嶋田氏のあやまちと不理解は無数にあり、枚挙にいとまがないほどである。3ページの図1では、アルハジ・ウマルのジハードを「フルベ族の聖戦によって成立した国家」のうちに数えているが、これはトゥクレール人のジハード国家であり、その目的も、客観情勢もフルベ人のそれとは異なっている。トゥクレールとフルベが多くの文化的、言語的共通性をもっているのは事実であるにせよ、両者は明確に区別されなくてはならない。12ページでは、「ジュラ商人の母語はバンバラ語なのである」とするが、ジュラとバンバラ、マリンケは共通の(むしろ正確には、互換性のきわめて高い)言語をしゃべるといふべきであって(Dalby 1971:4-6; 竹沢 1988:24)、ジュラの言語がバンバラ語を母語としているわけではない。14ページでは、サモリ・トゥーレのジハードについて、わたしがイスラムの拡大にたいして否

定的な効果をおよぼしたと述べたことを批判して、「そもそも竹沢氏は何故に、サモリについて語るのに、サモリ研究の権威 Yves Person の判断を参照しないのか」として、Person が「サモリ帝国滅亡後、各地に散っていったその残党を通じて、『イスラムの種は、白人の到来後、南部のマンデ系諸部族の中に花開くことになった』(Person 1979: 275) と結論づけている」と主張する(1988: 14)。しかしながら、Person がその数行上で、「植民地化の初期には、イスラムは広まるどころか、サモリの役割が反対の効果をもたらしていたように思われる。力づくの改宗は信仰の放棄をうながし、一方、無意識的にイスラムに影響されていた大衆は、征服者(=サモリ)の政策に反対するためにイスラムに対立するようになった」(Person 1979: 275) と述べていることは故意に無視されている。この Person の見解はまさにわたしの主張であり(竹沢 1988: 33)、Person がジハードという力づくの改宗に対して否定的な見解をもっていることは、くりかえし表明されているのである(Person 1979: 274; 1970: 97, 111)。さらに7ページでは、わたしがマンデ系の交易者集団が「早い時期からイスラムを受け入れていた」としていることを批判して、その根拠がどこにもないと主張する。しかしその根拠はいくらでもあるのであって、12世紀の Al-Idrīsī は、ワンガラとは金の交易のさかんな土地とそこに住む黒人をさし、かれらがイスラム教徒であると述べているし(Levtzion & Hopkins 1981: 111)、13世紀の Ibn Saʿīd は「ワンガラはこの土地の黒人であり、かれらのあいだでイスラムが広く広まっている」と明記している(*ibid.*: 186)。また14世紀に現地を訪れた Ibn Bṭṭūta は、ニジェール川沿いのジャの街の住人(マンデ系のマルカの街である)が「古くからイスラム教徒であり、祈りと学問に熱心である」(*ibid.*: 287) と断言しているのである。

以上のほかにも、わたしの論文の歪曲にみちた解釈がおこなわれているところが数箇所あるが(1988: 6, 9, 12)、それは論文をていねいに読みくらべればただちにわかることであり、ここでとりあげる必要はないであろう。わたしの前稿が「批

判」をうけることになったのは、おそらくわたしが手を広げて、西アフリカ・イスラム化にかんする包括的な視点を提出しようと試みたのが原因であると思われる。もっと視点をかぎって、「蛸壺」的な研究を発表していたのであれば、このような「批判」の対象になることはなかったかもしれない。しかしそれでは学問の進歩は不可能であろう。前稿がいささか性急な表現をとまっていたことをわたしは否定しないが、嶋田氏の「批判」をていねいに読んだ今でも、基本的には直すべき点はどこにもないと考えている。わたしの見解を表出する機会が2度与えられたことを、わたしはたいへん感謝している。

注

- (1) 嶋田氏の「批判」のうち、厳密な意味でわたしの所論そのものに向けられているのは、Trimingham の方法論がわたしのいうように「歴史主義的」ではなく、「類型論的」であるという指摘だけである。嶋田氏は、「Trimingham の基本視点になっているのは……、(わたしのいうように) 記述主義という意味での歴史主義であるどころか、イスラム化の構造認識の視点であり、その根底には、はじめに整理したような、イスラム化プロセスについての3種類の認識がある」(1988: 10) としたうえで、Trimingham のあげる3つの「類型」として、1. 交易者集団によるイスラム化、2. イスラム教師、聖職者によるイスラム化、3. 軍事的征服によるイスラム化、をあげている(1988: 2)。しかしながら、Trimingham じしんは1959、1962の2冊の書のどの場所でもこのような「類型化」をおこなっておらず、また類型論というには不可欠であるはずの基準や指標の提示もおこなっていない。Trimingham とくらべて嶋田氏のほうが類型論的志向をもっているのはまちがいないが、それはあくまで嶋田氏の Trimingham 解釈であって、Trimingham じしんの見解ではない。
- (2) この点は、とくに今日多くの批判をうけている点である。「17世紀と18世紀は『イスラムの停滞と異教の反作用』の時代として記述されてきたが、わたしも含めた増加しつつある歴史家の見解は、イスラムが多く挫折の経験にもかかわらず、この世紀をつうじて西アフリカの各地にかなりの進出をとげたということである」(Clarke 1981: 77)。「18世紀に、イスラムはサバンナ諸国家の社会・政治体系のなかに組みこまれており、この過程を停滞とよぶことはほとんど不可能である。ムスリム交易者の手で運ばれたイスラムは、森林地帯の北側でもっともダイナミックな文化的要素であった」(Levtzion 1975: 197)。

西アフリカのイスラム化に関する詳細な概観を与えている Willis 1979 や Hiskett 1984 は、19世紀のジハードを純粋な宗教運動として性格づけ、西アフリカのイスラム化の進展にたいするその役割を強調する点でむしろ Trimingham の立場に近いにもかかわらず、Trimingham に言及さえしていない。

- (3) このくだりを含んだ一節は、明らかに嶋田氏の誤訳である。嶋田氏は、「外見上のアナキーと、安全の欠如にもかかわらず、交易はさらに進み、何千というマンデの交易村が建設されたのであり、これを通じて、イスラムは、森林地帯に至るまで異教徒の間に信者を獲得していった」(嶋田 1988:8)とする。しかしこのうち、「信者」と訳されている *representatives* は「代理人」と訳すべきであり、Trimingham の真意は、イスラム交易者(=「代理人」)が各地に建設した交易拠点を通じて森林地帯にまで入りこんでいたというのであって、嶋田氏のいうように森林地帯の異教徒のあいだで「信者」の獲得が進んだというわけではない。嶋田氏はこの引用を根拠として、「Trimingham 自身は、こんな時代にも、交易活動を通じてのイスラム化は進展したとみてい」たと主張するが(嶋田 1988:8)、その主張には根拠がないことになる。
- (4) 西アフリカにおいては、知られているかぎり大規模な国家の成立がイスラム以降であることは、重視されなくてはならない。トンブクトーの2冊の歴史書はガーナ帝国の起源をイスラム以前においているが(*Tarikh el-Fettach*:76; *Tarikh es-Soudan*:18)、それがいかなる国家であったかについてのくわしい記述はない。むしろ近年の考古学者は、西サハラを南北に横断するかたちの「定期的交易が8世紀以前には存在しなかった」と述べることで(Devisse 1972:49)、ガーナ帝国についてより後世の起源を考えているようである。他にも、わたしが前稿で述べたように、イスラム交易者の活動は、西アフリカの多くの非イスラム国家(初期ハウサ、ダゴンバ、モシ、バンバラなど)の起源と発展に大きく関与していたのであって(竹沢 1988:26-27)、Trimingham は、イスラムが大帝国の支配層と交易者だけに受け入れられていた状態を形容して「インペリアル・カルト」や「階級宗教」というが、そもそも西アフリカでは(とくに中世の段階において)、国家の成立そのものがイスラムの浸透と不可分の関係にあったことが理解されなくてはならないのである。
- (5) フルベ人のジハードがおこなわれたのが、フータ・ジャロン、フータ・トロ、マッシナ、ハウサランドといった、西アフリカでもっとも経済的發展を見た地域であったことを押さえておくべきであろう。一方、南部セネガルやブルキナファソのように、交易ルートからはずれ、大きな経済的進展を見なかった地域に住むフルベ人はジハードを起こすことがなかった(アダマワ地方のフルベ人のジハードについては、別の解釈が可能であろう。比較的遅れたこの地

方に進出したフルベ人は、「文明化」の要素として作用することができ、容易に土着の諸民族を吸収・支配することができた。この支配・吸収の過程を通じての定着化と、フルベ社会内部での階層分化の進展が、ジハードによる国家建設をうながした主要な要因であったと思われる)。

- (6) ジハード以前にフルベ社会が経験した社会・経済的变化のうち、マッシナのフルベ社会の変化については(Monteil 1971:54-91)、ハウサ・ランドのそれについては(Hiskett 1984:104-108)を参照のこと。フータ・トロにおいては、16世紀いらい Denyanke とよばれるフルベ人の支配がつづいていたが、Saint-Louis のヨーロッパ人拠点との交易の進展と(17世紀にはセネガルから毎年15万枚の皮が輸出されていた、Curtin 1975:218-221)、モール人の南下と略奪とによって、大きな政治的混乱を経験していた(Oloruntimehin 1972:7-14; Robinson 1985:59-65)。ここではジハードは、「もっぱら宗教的な運動というより、むしろ国家的な独立運動としてあらわれた」(Barry 1972:193-194)ようである。
- (7) アル・ハジ・ウマルにたいして全体として好意的である Robinson も、かれのジハードがイスラムの拡大にたいしてむしろ否定的な効果をもたらしたことを認めている(Robinson 1985:367)。
- (8) 「ここでは(セグー地域では)、バンバラ人のあいだでイスラム化はいまだ進展する暇がなかった」(Marty 1920:48)。「ようするに、バンバラ民族は今日決定的に異教徒である」(*ibid.*:178)。
- (9) 以下に原文をのせる。The rulers of Ghana and Mali regarded direct authority over the commercial centres as more important than intrusion into the goldfield areas. それにつづいて Levztzion は、「かれらの収入は、この貴重な金属の産地にいたるルートを支配することでえられていた」(Levtzion 1980:115)と書いている。嶋田氏がなぜあのような訳をつけることができたのか、わたしにはまったく理解できない。
- (10) そのほかに農業技術の発展や、手工業その他の生産力の大幅な向上が見られ、これがとりわけガオ帝国では重要な役割をはたした。これらの点については、別の箇所でも論じてある(竹沢 1984; 近刊)。
- (11) Trimingham は2カ所でガーナ帝国崩壊後のソニケの移住と、それがイスラム化の進展にたいしてはたした貢献について書いているが(1962:31,60)、あわせても1ページにみたない記述であり(しかも注12に見るようなあやまちをおかしている)、かれらの活動の具体的内容についてはまったくふれていない。また82-83ページには、ジュラの活動についての記述があるが、「イスラムの親族祭祀としての弱い地位にもかかわらず、マリ帝国は西アフリカのイスラム化に貢献した」として、イスラム化を進めた主体を「インペリアル・カルト」としてこれをうけいれたマリ帝国においている。嶋田氏がいうように、

Trimingham が西アフリカのイスラム化の「基本流とみているのは、『平和手段』による、したがって歴史の表面にあらわれない地道な」(1988:10) プロセスであると考えうる根拠は、どこをさがしてもないのである。

- (12) Trimingham は、「かれらの(ソニンケの)交易者は、勤勉な交易者であるマンデ・ジュラと通婚し、かれらを改宗していった」と書いているところからも明らかなように(1962:31, 嶋田 1988:5でもくりかえされている), この2つを異集団として区別している。しかしこのくだりは2重にまちがっている。まず、マンデという語が非包括的にとらえられているが、ソニンケに対立する概念として用いるのであればマンデではなく、マリンケないしマンディングと呼ばれなくてはならない。つぎに、ソニンケがジュラ集団と通婚したというが、かれのいうソニンケ(むしろ原ソニンケというべきである)の移住が開始される以前には、ジュラ集団の存在はなかった。交易集団としてのジュラの形成そのものが「ソニンケ」の活動に負っているものであり、Trimingham 1962は西アフリカ・イスラムのセンターであったジャ・ディアの町の住人を、31ページではソニンケと記し、60ページではジュラと記しているが、この混乱が上の不理解に由来していることは明らかであろう。
- (13) この過程で形成された交易者集団が、ニジェール川中流域ではマルカと呼ばれ、ニジェール川南部地域ではジュラ、セネガンビアではジャカンケ、モシ地域ではヤルシ、ハウサランドではワンガラと呼ばれたのである。これらの集団のうち、マルカ(Monteil 1971:31-36)、ジャカンケ(Sanneh 1976:54-57)、ジュラ(Person 1963:128-133)、ワンガラ(Perinbam 1974:684)、そしてフルベ社会に吸収された交易者集団であるジャワンベ(Tauxier 1937:144)が、いずれもニジェール川中流の内陸三角洲に起源をおいていることは、きわめて興味深い事実である。わたしは前稿で述べた理由によって(竹沢 1988:22, 39)、これらのマンデ系交易集団は、ガーナ帝国を滅ぼしたムラービト朝の手ではなく、サハラのイバード派のベルベル交易者の手によって、最初に内陸三角洲でイスラム化されたと解釈できると考えている。すなわち、西アフリカのイスラム化の初期段階として、マリック派のムラービト朝-ガーナ帝国という系譜と、平和主義的なイバード派のベルベル交易者-マリ帝国-ワンガラという系譜である。これにたいし嶋田氏は、わたしの以上のような考えを批判して、「マンデ系商人の『最初の本拠地』が、ニジェール川内陸デルタのマーシナである筈もなく、「マーシナは、ガーナ帝国衰微後移動してきたソニンケ系商人の第二次、あるいは第三次の本拠地である、というのが一般的な理解である」(1988:6)とするが、その根拠としてあげるのは例によって Trimingham だけである(Levtzion 1980:65もあげられているが、該当する箇所とその前後にはそのような記述はない)。

わたしたちに課せられているのが Trimingham 説の無批判な反復ではなく、新しく正確な資料にもとづいてそれを批判していくことであると、あらためて述べる必要があるだろうか。

- Barry, Boubacar, 1972, *Le Royaume du Waalo*, Maspero.
- Clarke, Peter B., 1982, *West Attica and Islam*, Edward Arnold.
- Cuoq, Joseph M., 1975, *Recueil des sources arabes concernant l'Afrique occidentale du VIIe au XVIe siècle*, Ed. du CNRS.
- Curtin, Philip D., 1975, *Economic Change in Precolonial Africa*, Univ. of Wisconsin Press.
- Dalby, David, 1971, "Distribution and Nomenclature of the Manding People and Their Language", C. T. Hodge, ed. *Papers on the Manding*, Indiana University Press.
- Delafoss, Morice, 1912, *Haut-Sénégal-Niger*, 3vol., Maisonneuve.
- Devisse, Jean, 1972, "Routes de commerce et échanges en Afrique occidentales en relation avec la Méditerranée", *Revue d'Histoire économique et sociale*, pp. 42-73, 357-397.
- Fernandes, Valentim, 1938, *Description de la côte d'Afrique, de Ceuta au Sénégal*, traduit par P. de Cenival et Th. Monod, Maisonneuve.
- Hiskett, Mervyn, 1984, *The Development of Islam in West Africa*, Longman.
- Houis, M., 1959, "Le groupe linguistique mandé", *Notes africaines*, n. 82, pp. 38-41.
- Last, D. M. and M. A. Al-Haji, "Attempts at Defining a Muslim in 19th Century Hausaland and Bornu", *J. of the Historical Society of Nigeria*, 3-2, pp. 231-259.
- Levtzion, Nehemiah, 1975, "North-West Africa: from the Magrib to the Fringes of the Forest", *The Cambridge History of Africa*, v. 4, pp. 142-222.
- Levtzion, N. and J. F. P. Hopkins, 1981, *Corpus of Early Arabic Sources for West African History*, Cambridge U.P.
- Marty, Paul, 1920, *Etudes sur l'Islam et les tribus du Soudan*, t. 4, La région de Kayes, le pays Bambara, le Sahel de Nioro, Leroux.
- Monteil, Ch., 1971 (1932), *Une Cité soudanaise, Djenné*, Ed. Anthropos.
- Murdock, George Peter, 1959, *Africa: Its Peoples and Their Culture History*, MacGraw-Hill.
- Oloruntimehin, B. O., 1972, *The Segu Tukolor Empire*, Longman.
- Perinbam, B. M., 1974, "Notes on Dyula Origins and Nomenclature", *B. de l'IFAN*, 36-4, pp. 676-690.
- Person, Yves, 1970, "Du Soudan nigérien à la côte Atlantique", H. Deschamps, éd., *Histoire générale de l'Afrique Noire*, PUF., pp. 85-121.
- , 1979, "Samori and Islam", J. R. Willis, ed., *Studies in West African Islamic History*, v. 1, Frank Cass, pp. 259-277.
- Robinson, David, 1985, *The Holy War of Umar Tal*, Clarendon.

- don Press.
- Rodney, Walter, 1968, "Jihad and Social Revolution in Futa Djallon in the Eighteenth Century", *J. of the Historical Society of Nigeria*, 4-2, pp. 269-284.
- Sanneh, Lamin, 1976, "The Origins of Clericalism in West African Islam", *J. of African History*, 17-1, pp. 49-72.
- 嶋田義仁, 1988, 「西アフリカ・イスラム化パターンの3類型と『フルベ族の聖戦』—S. Triminghamの西アフリカ・イスラム史論をめぐって」『アフリカ研究』, 33, pp. 1-18.
- 竹沢尚一郎, 1984, 「アフリカの米」『季刊人類学』, 15-1, pp. 66-118.
- , 1988, 「西アフリカのイスラム化にかんする一考察——歴史主義批判」『アフリカ研究』, 32, pp. 19-43.
- , 近刊, 「イスラムと西アフリカの物質文化」『国立民族学博物館研究報告別冊』
- Tarikhel-Fettach*, 1913-1914 (1981), traduit par O. Houdas et H. Delafosse, Maisonneuve.
- Tarikh es-Soudan*, 1898-1900 (1981), traduit par O. Houdas, Maisonneuve.
- Tauxier, Louis, 1937, *Moeurs et histoire des Peuls*, Payot.
- Trimingham, J. S., 1959, *Islam in West Africa*. The Clarendon Press.
- , 1962, *A History of Islam in West Africa*, Oxford U.P.
- Waldman, Marilyn Robinson, 1965, "The Fulani Jihad: A Reassessment", *J. of African History*, 6-3, pp. 333-355.
- Wilks, Ivor, 1982, "Wangara, Akan and Portuguese in the Fifteenth and Sixteenth Centuries", *J. of African History*, 23-3, 4, pp. 333-349, 463-472.
- Willis, John Ralph, 1979, "Introduction: Reflexion on the Diffusion of Islam in West Africa", J. R. Willis, ed., *Studies in West African Islamic History*, v. 1, Frank Cass, pp. 1-39.